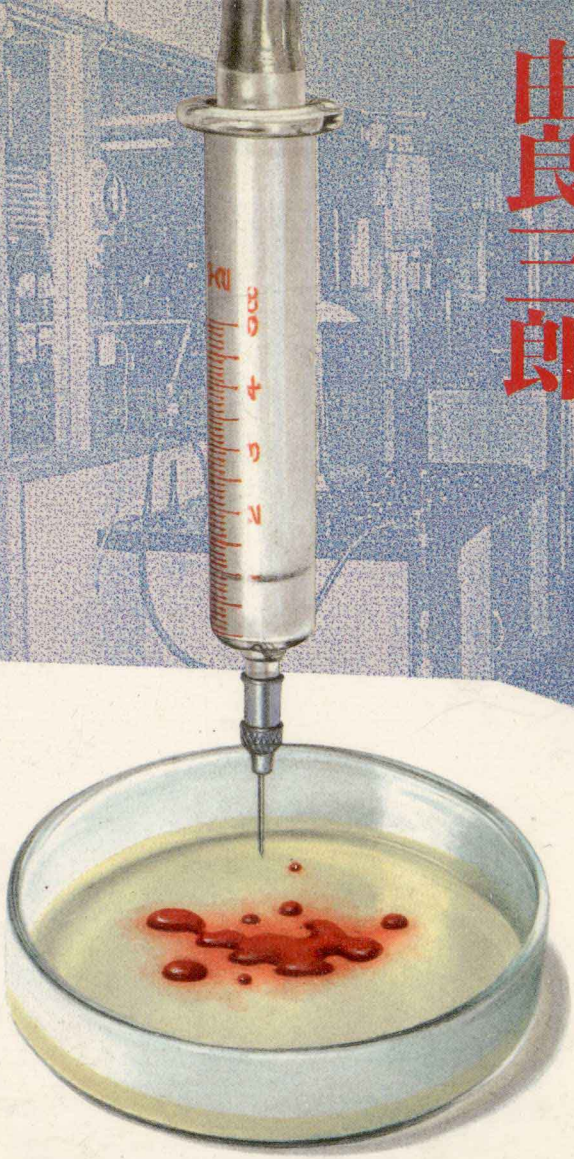
完全犯罪研究室

由良三郎



新潮社

研究室

由良三郎

新潮社

●新潮ミステリー倶楽部特別書
ゆらさぶろう●発行・1989年
者・佐藤亮一●発行所・株式会社新
町71／振替東京4—808／電話・業
03（266）5411●印刷所・株式
社●価格はカバーに表示してあります●乱
通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお
© Saburō Yura 1989, Printed in Japan
下ろし●完全犯罪研究室●著者・由良三郎・
7月25日●2刷・1989年9月20日●発行
潮社・郵便番号162東京都新宿区矢来
務部03（266）5111・編集部
会社光邦●製本所・大口製本株式会
丁・落丁本は、ご面倒ですが小社
取替えいたします。
ISBN4-10-602712-7

●目　〈完全犯罪研究室〉　次●

プロローグ　5
第一章　疑惑の死因　9
第二章　後遺症　31
第三章　ワクチン　56
第四章　秘密報告書　81
第五章　対症療法　106
第六章　脳出血　126
第七章　非凝固血　151
第八章　ドグマ　178
第九章　陰性証明　189
第十章　完全犯罪　217
エピローグ　237

この物語はフィクションであり、文中の団体および個人の名前はすべて架空で、モデルも存在しない。類似の名称や出来事などがあれば、それらは偶然の一致に過ぎない。

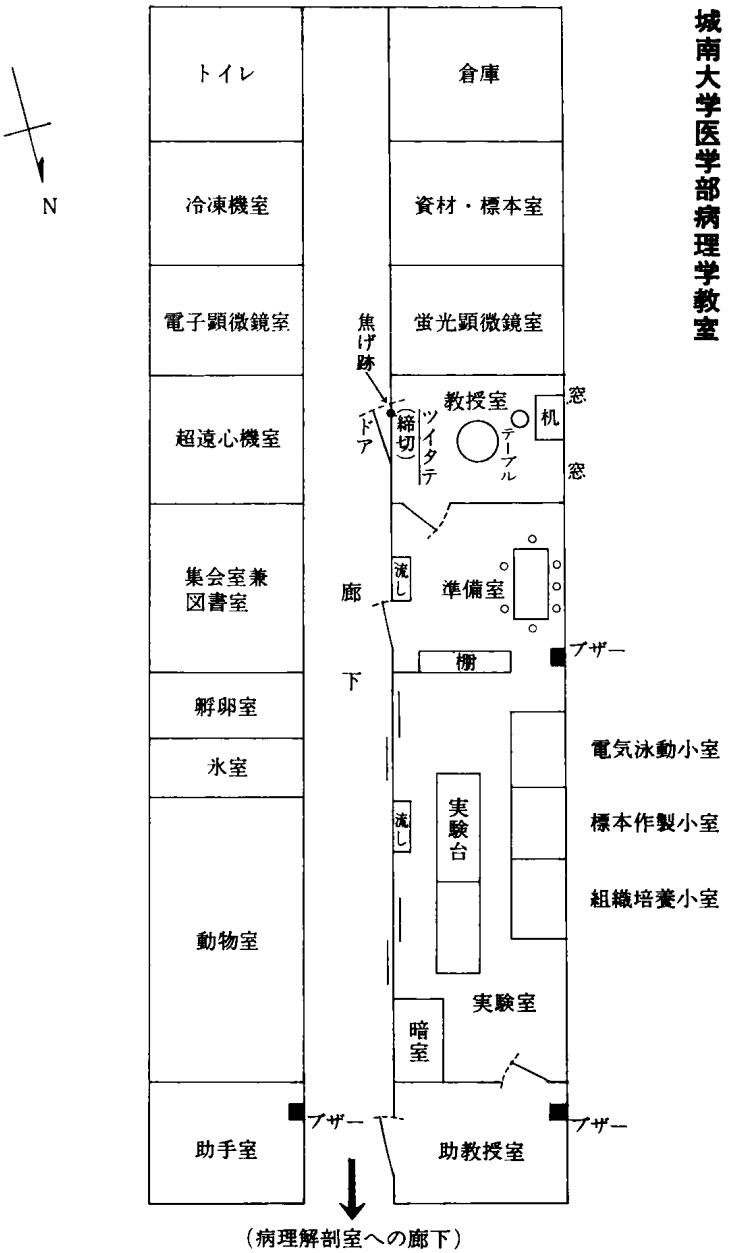
著者

装幀　平野甲賀
装画　辰巳四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

完全犯罪研究室

城南大学医学部病理学教室



プロローグ

ここに記すのは、私がその渦中に巻き込まれたある殺人事件の記録である。と言っても私は警察官でもなければ私立探偵でもない、一介の病院勤務医である。

まず自己紹介をしておこう。私の名は山城和也、年は現在四十五歳だが、これから語る事件の起こったのが一昨年だから、当時は四十三歳の後厄だったわけである。もちろん世帯持ちで、家には妻と男女二人の子供がいる。妻は……いや、こんなことは物語と直接の関係がないから省略させていただこう。とにかく私は中肉中背の男性、見てくれは眉目秀麗とはいかないまでも、まあまあ十人並みだと自惚れている。ちょっと大きな病院に行けば必ず二人や三人は見掛ける臨床医――鼻下にちょび髭を蓄え、口はばったいが、平均より少し高価な眼鏡を掛けている内科医――を想像してくだされば充分だ。

話の舞台は東京の大田区蒲田にある私立城南大学医学部の病理学教室である。

ここで、一見、蛇足のようだが、教室という言葉の意味を説明しておこう。

大学というところは警察や刑務所などと同じで、あまり外部の人々の覗き見を許さない閉鎖社会

だから、そこで使われている言葉にも特殊用語が多い。

一般には、ただ教室というと、小中学校などで五十人ほどの生徒が机を並べている部屋を想像する。大学でも、それと同じような講義室を教室と言うが、学部を構成する単位としてのセクションをさすこともある。講座制の学部の場合には、各講座を受持つ教授、助教授、講師、助手などのピラミッド型人員構成、およびそれらの人々が使う研究室などを総称して、教室と呼んでいる。

ついでだから、もう一つ、助手という肩書についても触れておきたい。一般には助手という名から受ける印象は、なんとなく安っぽくて、いかにも下っ端といった感じだろうと思う。ところが、大学の――とくに医学部の――中では、かなり偉い人という受け取り方をされる。事実、たとえば臨床関係の医局などでは、教授、助教授、講師に次ぐスタッフであって、通常は医局長や外来医長も助手なのである。少なくとも大学院の学生や研修医、あるいは外部から通ってくる研究生などよりは、一段上の位であることは間違いない。

話が逸れたが、私がこの事件の際に、何故たまたまその教室に居合わせたかという事情をお話ししておきたい。

簡単に言えば、医学博士号を持たない中年の医者が、急に学位に憧れるようになり、博士勉強のためこの大学の基礎医学教室に入り込んでいたということだが、もっと詳しく説明すると実は次のような経緯があったのである。

私が国立松本大学を卒業した頃は、例の学園闘争が全国に波及し始めていた。おっちょこちょいの私は仲間に祭り上げられて、いっぱしの全共闘指導者になったつもりで運動の先頭に立って旗を振っていた。そして大学院ボイコットを叫び、医学博士号拒否の旗印を掲げた。ところが、何年か後に気が付いたときには、闘争の嵐は収まっており、かつての仲間はそれぞれの教室で、指導教授の鼻毛を抜きつつ、博士勉強にいそしんでいた。

新しい波に乗り損ねた私は、大学病院の内科から町の病院へと転々と渡り歩いた。そして現在勤めている東京五反田の誠仁会病院に落着いたのだが、そこで予期しない不愉快な出来事に遭遇したのである。

それは、病院の内科医長が退職した際、年齢と経歴から見て当然私がその後釜に推薦されると思っていたのに、私より若い医師がさっとそのポストをさらってしまったことだった。この人事に疑問を持った私は、院長にそれとなく不満をもらしたところ、あっさり、〈君は博士号がないからね〉というご託宣である。

ここに到って初めて私は若かったときの無謀を後悔したが、今さらどうしようもない。そこで、この年で改めて博士号取得のための勉強をする決心をしたのである。院長の承諾を得、伝手を求めて城南大学の瀬尾貴利教授にコネを付け、研究生として隔日にその病理学教室に通うことにした。そして、一念発起した昭和六十一年の四月から約半年、六十の手習いならぬ四十三歳の博士勉強がやっと順調に波に乗るかと思われた九月末日に、不運にもこの事件に遭遇した、という次第なのである。

読者の中には、こうおっしゃる方もいるだろう。大学の基礎医学教室などという浮世離れした環境では、世俗の欲得とは無縁な仙人のような学者が真理の探求に余念がないだろうから、これからお話しするようなことなど起こるはずがない、と。

だがそれは大学の教室という所をご存じないからだと思う。教室とはいってもそこに集まっているのは煩悩を百八つも持つという人間である。時として物欲、エゴイズム、嫉妬、憎悪のうず巻く、どろどろした人間模様が描き出されることもあるのだ。学問を取り除けば、すべては一般社会となんら変わりはない。いや、教室というものが特殊な閉鎖社会であるために、いったん誤った方向に走り出すと、かえって歯止めが利かない傾向さえあるのも事実である。

さて、前置きはこのくらいにして、いよいよ私が自分の目で見、自分の耳で聞いたあの陰惨な、そして前代未聞と言ってもよいあの不思議な殺人劇についてお話しすることにしよう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第一章　疑惑の死因

昭和六十一年九月三十日午前十時。昨夜来の雨が上がったばかりで、空は鉛色の雲に包まれ、ときおり吹く風は季節外れの生暖かさだった。

東京虎ノ門にある国立教育会館では、日本癌病理学会の年次総会が開かれているところである。報告演説は三会場に分かれて行なわれるのだが、第一日の呼び物が、第一会場に当てられた一階メインホールでこれから発表される、わが城南大学瀬尾貴利教授と瀬尾みさお助教授の、「ベータープロピオラクトン処理ヒトTNFの抗癌力と毒性消失」であることは、衆目の一致するところだった。

その証拠には、第一会場の椅子席収容人員が千五百名であるのに、早くも時刻前に満席となり、座席を確保し損なった聴衆が、後方と左右の壁沿いに文字どおりひしめき合っていた。

こういう光景は、学会では滅多に見られない。

それだけではない。椅子席の最前列には、明らかにジャーナリズム関係と思われる人々が、後席の聴衆の迷惑もかえりみず、大きなフラッシュライトの笠やテレビカメラを上に差上げ、壇上に演

者が現われるのを今や遅しと待ち構えていた。
ステージの上方には、第三十六回日本癌病理学会と大きく横書きした幕が張られている。その下には、映画館のシネマスコープに用いるようなスクリーンがあり、左右二台のスライドプロジェクターからの幻燈が同時に映写できるようになっている。
ステージの左裾には、牧師の説教台のような小型演壇が立っており、その上には、演者の手許を照らすための隠しスタンドがある。それと向き合うように、右裾には、一台のテーブルが置かれ、その前面に「座長、実吉貢博士」と墨で書かれた紙が垂れていた。
学会の会場なので、派手な飾付けはいっさいない。殺風景そのものである。だが、それだけにまた、これから何分か後に展開されるであろう、演者とフロアの質問者間の激烈な論争を期待させ、一種異様な緊張感が会場を支配していた。
座長席に着いている厳めしい老人は、癌の研究では日本の権威者の一人である東明大学の実吉教授である。彼の右手がテーブルの上のマイクを握った。
博士は勿体ぶった咳払いをしてから、おもむろにマイクに口を近付ける。顔が心持ち青い。
「只今より、演題の１００５番、『ベータープロピオラクトン処理ヒトＴＮＦの抗癌力と毒性消失』が発表されます。なお、私はここで皆様にひじょうに悲しいお知らせをしなくてはなりません。と申しますのは、本日ここでこの輝かしい研究成果を発表されるはずであった瀬尾貴利教授が、昨日突然、脳出血で急逝されたのでございます」
会場のあちこちで驚きの声が漏れ、やがてそれが幾重にも波紋を起こし、数秒後には満堂にエコーした。
座長は無言のまま、聴衆が静まるのを待った。
約三十秒ほど置いて、彼はふたたび口を開いた。

「そこで、この演題の取扱いでございますが、プログラムならびに抄録に印刷してございます通り、当初は故瀬尾教授が演説される予定でございましたが、発表責任者は教授と瀬尾みさお博士の連名となっております。したがいまして、瀬尾教授なき今日、残られた唯一の共同研究者である瀬尾みさお博士に、故教授に代わっての発表をお願い致したいと思うのでございます。なお、改めてご紹介するまでもありませんが、瀬尾みさお博士は、瀬尾教室の助教授であられまして、これまでご夫婦で車の両輪のように、一つの研究に没頭されてきましたことは、周知のことでございます。本日も、講演後の討論は、皆様が直接故瀬尾教授と質疑応答するのとなんら変わらぬ、実り多いものがあると確信しております。では、瀬尾みさお先生、お願い致します」

座長が軽く頭を下げると、それに応じて、ステージの裾にあるフロアからの小さな階段を、瀬尾みさお助教授が静かに登ってゆく。紺のスーツの上着には、ブローチも何も付けていない。僅かに、細い金鎖のネックレスが暗い照明にきらりと輝いて見えただけである。半白の髪を無造作に後ろで束ねているが、助教授はこの髪型を変えたことがない。彼女は当年とって五十三歳。前日亡くなった夫が五十五歳だし、職業が職業だから、化粧っ気がないのは無理もないが、今日くらいは、という思いもないではない。

とは言え、夫の死を悼んで打ちしおれているという風情でもない。聴衆の中には、彼女が涙を拭きながら演説する姿を予想した人もいただろうが、そういう人にとっては彼女のこの淡々とした様子は意外だったと思う。しかし、私には少しも不思議ではなかった。普段の生活ぶりを知っていたからである。自宅で故貴利教授と一緒のときには、素晴らしい良妻なのかも知れないが、実験をしているときの彼女は、一人の科学者になり切っていた。学生に講義をするときには、教育者以外の何ものでもない。一つのことに全神経を集中する性格なのだ。今は研究発表のこと以外は眼中にないはずである。涙など流している余裕はない。泣くのなら、この発表が無事に終了し、夫のなきが

らにその報告をするときで、しかも誰もいないところで泣くだろう。
彼女のきりっとした表情は、聴衆にある安心感と厳粛な気分を与えたようだった。ここでじめじめされたのでは、やり切れないし、また、一同の同情に訴えて質問の鋒先を鈍らせようとする意図が認められたら、不愉快さを否めなかったろう。そうでないさっぱりし過ぎたともいえる態度は、かなりの好感をもって迎えられたと思う。
私自身も、みさお助教授のごく自然なフェアネスには心の中で拍手を送った。
彼女が演壇に向かい、座長と聴衆に一礼すると、多数のフラッシュがいっせいに輝いた。それが合図のように、会場を揺るがすような拍手が湧き起こった。みさお助教授の顔が心持ち赤らんだ。
彼女の低いながらしっかりした声が演壇上のマイクを捉える。
「従来、癌の薬として、いろいろなものがトライ・アンド・エラーの場に供されて参りましたが、未だに決定的なもののないことは、よくご存知の通りでございます。ところが、一九七五年に、米国のオールド博士のもとでカースウエルらは、それまでにまったく知られていなかった、マクロファージ由来のサイトカインであるＴＮＦの存在を明らかにしました。これは優れた制癌作用を示しましたが、毒性が強いので臨床的にはまだ使用不可能でございます……」
マイクを通して、その声は静かに流れる。初めはやや低かったが、次第に調子が上がってくる。それにつれて、熱心に耳を傾ける聴衆の間にも、興奮が高まってくる。もちろん私も名誉あるこの教室の一員として、このような場に居合わすことができた感激で胸がいっぱいだった。
それにしても、かえすがえすも残念なのは、この晴れの舞台を踏めずに、一日違いで急死された瀬尾貴利教授のことである。いや、実は私自身にとっても、彼の死は青天の霹靂だったのである。せっかく実験がスムーズに緒につき、博士号が目の前にちらつき出したというのに、また別の教室に伝手を求めて移らなくてはならない。いくら良い研究論文を書いても、それを教授会に提出して

くれる教授がいなくては博士号の申請はできないからだ。こう言っては申し訳ないのだが、正直なところ、瀬尾教授にはせめてもう二年ほどは生きていてもらいたかった。だが、今となっては、そんな愚痴を零してもどうしようもない。

ぼんやりそう考えていた私の耳に、突然みさお助教授の一段と高い声が響いた。

「わたくしどもは、遺伝子工学を応用して作られましたヒトのＴＮＦを用い、その抗癌活性を見るには、バルブＣマウスの皮下に移植致しました、メチルコラントレン誘導Ａ線維芽肉腫その他の、十四種の腫瘍への注射を行ない、その縮小を観察致しました。またＴＮＦの毒性は、リポプロテインリパーゼ活性の抑制、動物の体重減少と死亡を指標として測定致しました。研究の目的は、ＴＮＦの抗癌力を保持しつつその毒性だけを失わせる方法を開発することでございましたが、図らずもベータープロピオラクトン――以下ＢＰＬと略称致します――で処理したＴＮＦがその理想通りであることを発見したのでございます。もちろんこれはまだ動物実験の範囲でございますが、もしこの結果がそのまま人体にも当て嵌まりますならば、わたくしたちは人類の歴史上初めて、極めて有効でしかも安全な癌の治療薬を開発したことになります。これが決して夢ではないという論拠は、使用致しましたＴＮＦがヒト型なので、ただちに癌患者に応用が利くということでございます。それでは、以下、スライドにより、わたくしどもの実験結果をご説明致します」

みさお助教授の声にはいささかの乱れもない。私はその前日に大学内で行なわれた特別講義で、この話を瀬尾貴利教授の口から聞いていたのだが、演者がみさお助教授に代わり、しかも学会という緊張した雰囲気のせいか、ひじょうに新鮮な迫力を感じる。つい彼女の言葉に引込まれ、思わず体を固くして両拳を握りしめている自分に気づく。

同じ内容の話を二度聞く私でさえそうだったのだから、初めて耳にする大部分の聴衆にとっては、恐らく彼女の演説は衝撃的だったのではあるまいか。初めのうちややざわついていた報道関係者の

一群でさえ、今は静まり返り、咳をする者もいない。
その張り詰めたような空気の中を、みさお助教授の一語々々念を押すようなアルトの響きが走り抜ける。

これだけの人をメインホールに惹き付けたものは、言うまでもなく、その日の朝刊の社会面に載った記事だった。前日、瀬尾貴利教授が学会演説の予行演習のような意味で、大学内で全学年の学生を対象に特別講義を行なったのだが、そのとき、数社の新聞記者はあらかじめ通知を受けていた。彼らは聴講後、記者会見を申込んできた。記者連中の顔つきは一様に熱気を帯びていた。この研究の重大さを認識したらしい。その証拠にこの日の朝刊の社会面は、瀬尾教授の新研究一色に塗り潰されていた。

しかしまだ前夜の時点では、彼らは問題の人、瀬尾教授が急死したことを知らなかった。教授の死は葬儀の日取りが決まってから新聞社に通知される予定だったからである。それ故、この大研究が瀬尾教授の糟糠の妻であり、共同研究者でもあった瀬尾みさお助教授によって発表されるなどという異例事は、ますますそのニュースバリューを高めるものであったろう。

私は、みさお助教授の演説を聴きながら、朝刊に載った記事のことを思い返していた。それは毎朝新聞の社会面の右上部に、五段抜きで掲げられたものである。トップに横書きで大きく〈日本最初のノーベル医学賞成るか〉というセンセーショナルな見出しが付いていた。

私立城南大学医学部（東京都大田区蒲田二丁目）の病理学教授瀬尾貴利博士は、現在世界でもっとも有望視されている癌の薬ＴＮＦ（ティーエヌエフ）の実用化に関する重大発見をし、これを三十日に東京虎ノ門の国立教育会館で開かれる日本癌病理学会で発表するが、それに先

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.